



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	フィールディングとパトロンたち
Author(s)	佐久間, 良子
Citation	英學論考(36): 3-10
Issue Date	2007
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/95183">http://hdl.handle.net/2309/95183</a>
Publisher	東京学芸大学英語教育学科
Rights	

## フィールディングとパトロンたち

佐久間 良子

18世紀イギリスは中産階級の読者層が増大し、書籍業者の力が強まった一方で、上流階級のパトロンによる作家庇護の慣習が衰退し、消滅した時代である。この時代の作家、パトロン、書籍業者および読者の関係を詳しく論じた A. S. コリンズ (A. S. Collins) によれば、18世紀初頭、アン女王の治世が終わる 1714 年までは、政治的指導者や富と地位のある者にとって、文学や芸術のパトロンとなるのが、社会的地位の飾りとして必要だった。それが、ハノーヴァー王朝が始まり議会の力が強くなると、官職や年金が議員を買収する手段となって、作家や文士はその恩恵に浴することがめっきり少なくなった。とくに実利的なウォルポール (Sir Robert Walpole, first Earl of Orford, 1676-1745) が権力を握ったことがそれに大きく影響しているという。

また、パトロン制の衰退には、文士、作家の数が急増し、パトロンとなる政治家や貴族たちにとって作家の価値を判断するのが難しくなったことも、その要因の一つにあげられるだろう。ジョンソン博士 (Samuel Johnson, 1709-84) が『英語辞典』(*A Dictionary of the English Language*, 1755) 編纂に際し援助を求めたときにはすげなくあしらったチェスターフィールド (Philip Dormer Stanhope, fourth Earl of Chesterfield, 1694-1773) が、辞典の完成まぢかになってから週刊紙『ワールド』(*The World*, 1753-56) に2度にわたって賛辞を寄せ、ジョンソン博士から手ひどいしつぺ返しの手紙を受け取ったというのは、有名な話である。チェスターフィールドの方では、辞書の計画書を受け取ったときにはまだ、援助を求めてくる多くの文士のなかでジョンソンが優れていると判断する材料があまりなかったと思われるので、多分に気の毒なところがある。しかし、彼はこれをまったく気にしていないという態度をとり、ジョンソンの出版業者で上記『ワールド』紙の所有者でもあるドズリー (Robert Dodsley, 1703-64) が彼を訪問したとき、この手紙が誰でも読めるように机の上に広げてあっただけでなく、チェスターフィールドはこれをドズリーに読んで聞かせ、その文章を褒めたという。チェスターフィールドは政治家、文人たちのパトロンとしてばかりでなく、庶出の息子フィリップがまだ5歳のときからほとんど毎日のように書き送った手紙(*Letters To His Son*, 1774)によっても知られている。

本稿では、サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson, 1689-1761) とともに18世紀イギリス小説家の双璧をなし、イギリス小説の父とも言われたヘンリー・フィールディング (Henry Fielding, 1707-54) とパトロンたちの関係を、主としてバテスティン (Martin C. Batesin) による伝記を基にたどってみたい。地方の本屋の息子であるジョンソンと違い、フィールディングは名門の流れを汲む、紳士階級の出身である。名前の綴りは少し違っているが彼の4代前

の先祖ウィリアム・フィールディング (William Feilding, 1582-1643) は初代デンビー伯爵 (Earl of Denbigh)、祖父の兄は3代目デンビー伯にして2代目デズモンド伯だった。後にフィールディングの最初のパトロンとなるレディ・メアリー・ワートリー・モンタギュー (Lady Mary Wortley Montagu, 1689-1762) はその孫にあたる。そしてフィールディング自身の祖父は、司教まではいかなかったが高位の聖職者、父エドモンド (Edmund Fielding, 1680-1741) は軍人で、最後は中將にまでなっている。また、母方の祖父は高等法院、女王座部 (Queen's Bench) の判事を務めたサー・ヘンリー・グールド (Sir Henry Gould, 1643-1710) である。これらの有力な親戚に加え、フィールディングにはイートン・カレッジの学友やその親戚、知人という繋がりもあり、パトロンを得やすい条件があった。彼の才気はイートン在学中から十分に発揮されていたはずで、パトロン側としても彼の能力について判断に困ることはなかっただろう。もっとも当時の考え方からすると、そのような家柄の人間にとって文筆業は相応しい職業ではなかった。レディ・モンタギューは娘に宛てた手紙 (23 July, 1754) に、フィールディングが「(彼が自分で言ったことですが) 最初に世の中に出たとき、雇われ仕事の物書きになるか貸し馬車の御者になるしかなかったのは、気の毒なことでした」と書いている (“was to be pity'd at his first entrance into the World, having no choice (as he said himself) but to be a Hackney Writer or a Hackney Coachman”) (Montagu, 66)。

フィールディングのこのような状況は、家庭の事情によるものである。父エドモンドはもともと浪費家であったうえ、妻セアラ (Sarah Gould Fielding, 1682-1718) が、11歳になる直前のヘンリーと4人の娘、そして幼い末息子を残して死ぬと、それから1年もたたないうちに再婚し、さらに1729年には3度目の結婚をしている。このため家族も増え (子供の数は、バステインによれば13人)、長男のヘンリーは父親からの援助をあまり期待できなかった。実際、彼は父から年に200ポンドを受け取るようになっていたが、これがきちんと支払われていたようすはない。ヘンリーは古典を学ぶため1728年の3月にオランダのライデン大学に入学するが、このときは3ヶ月余り、そして翌年2月から4月まで2ヶ月あまりライデンに滞在しただけである。

ライデンへ行く直前の1728年2月に、彼の最初の劇『恋の種々相』 (*Love in Several Masks*) がドルーリー・レイン劇場で4晚上演された。<sup>1</sup> 彼が劇作家としてデビューできたのはレディ・モンタギューの力添えによるものだが、このレディ・モンタギューの友人だったのが、当時2度目の首相の座にあったロバート・ウォルポールである。無名の若者の劇作が上演されるにあたっては、この政界の最高権力者の影響力が大きく働いたと考えられる。後にフィールディ

<sup>1</sup> これを始めとして、演劇検閲令の施行後に上演されたものも入れると、劇作家としてフィールディングは喜劇、笑劇、バラッドオペラ等、全部で26本の作品を残している。近年ウエズリアン版全集の劇の部が2冊出版されている。Henry Fielding, *Plays*, vol. I, 1728-31, ed. Thomas Lockwood (Oxford, Clarendon Press, 2004); vol. II, 1731-4 (2007).

ングがウォルポールを攻撃する劇を次々と発表し、それが演劇検閲令 (Theatrical Licensing Act) につながるという展開を考えると、これは意外なことに思えるが、親戚以外でフィールディングの最初のパトロンは、後の宿敵、ウォルポールだったのである。

フィールディングとウォルポールの関係についてはバテスティンが詳しく考察しているが、それによればフィールディングは 1728 年に、ウォルポールに反対する勢力が出している新聞に掲載された詩と散文で、初めてウォルポールを風刺しているという。このうちの一つは、ノーフォークにあるウォルポールの館ホートンを訪れたときに大広間の天井から下がっていた大きなランタンを歌った風刺詩「ノーフォークのランタン」(“Norfolk Lanthorn”) で、これは 1728 年 7 月 20 日の『クラフツマン』(*The Craftsman*, No.107) に掲載された。もう一つはその 2 週間あとの 8 月 3 日に、やはり反対派によって発行されていた『ミスツ・ウィークリー・ジャーナル』(*Mist's Weekly Journal*, No.172) に載せられた「笑いの効用」(“On the Benefit of Laughing”) である。前者は明らかにウォルポールによる富の誇示を笑っていて、誰でも知っている曲に合わせて歌うようになっていたため、ホイッグ党内のウォルポール反対派や反対党のトーリー党支持者たちが面白がってコーヒーハウスで歌ったという。後者のほうはウォルポールをからかったところが少しはあるが、風刺の要素は少ない。<sup>2</sup> フィールディングはただ溢れるばかりの機知を発揮しただけで、ウォルポールに敵対したつもりはまったくなかったらしく、「ノーフォークのランタン」が出たあとウォルポールの接見の場に現われ、ウォルポールに咎められたときも、食べていくために書いているだけだと答えたという。まさに彼の傑作『トム・ジョーンズ』(*The History of Tom Jones, a Foundling*, 1749) の主人公を思わせる、陽気で冗談好きの、無思慮な若者らしい態度である。

フィールディングはつねに借金に追いまくられていた。それはまったく父親譲りで、陸軍中將にまで出世した彼の父エドモンドは、死ぬ 7 ヶ月まえの 1740 年 11 月に、借金のためにフリート監獄に収監されている。と言っても監獄そのものに入れられたわけではなく、金を払って、監獄に隣接するルール地域内で暮らしたのだが、エドモンドがそこで翌年の 3 月に 4 度目の結婚をしたため、彼の遺産が結婚 3 ヶ月の未亡人の方へ行ってしまったことも、フィールディングを失望させたことだろう。しかし、この女性はこの遺産によってその後ほぼ 30 年にわたって安楽に暮らしていくことができたのにたいし、フィールディングの方は、たとえそれが手に入ったとしても生活の安定にはつながらなかっただろう。彼が手にした金をあつという間に使い果たす能力は、まさに「一種の才能(almost a talent)」と言ってもよいくらいだった (Battestin, 447)。例えば、劇作家として大成功を収め、莫大な収入を得ていた 1732 年に、数週間の間に

<sup>2</sup> この 2 編はフィールディングの著述とは特定されていなかったのだが、バテスティンは、これらをフィールディングの作品と考えると彼とウォルポールの関係の変化と時期的にぴったり合って説明がつくとして、フィールディングが匿名で『クラフツマン』に発表したと思われる論説を収録した本の補遺に入れている (*New Essays by Fielding*, 1999)。

2つの劇がもたらしたほぼ 1000 ポンドの収入を、フィールドিংはたちまち賭けて騙し取られてしまったという。また、『ジョーゼフ・アンドルーズ』(*The History of the Adventures of Joseph Andrews and of his Friend Mr Abraham Adams*, 1742)を出版したときには200ポンド近い金額が支払われ、『雑文集』(*Miscellanies*, 1743)の予約によってもかなりの額(約650ポンドともいう)の収入があったにもかかわらず、長年の友人にずっと以前に借りた金を返していない。しかし、このすぐあと6歳にもならずして死んだ愛娘シャーロット(Charlotte Fielding, 1736-42)の葬儀には費用を惜しまないところが、彼の性格をよく表わしている。

ウォルポールもパトロンだったときに金銭的な援助をしたらしく、10年以上あとの1740年にあるウォルポールの支持者は、フィールドিংは借金が返せず拘留されていたのをウォルポールの援助で救われたと書いて、彼の忘恩を非難している。忘恩は『トム・ジョーンズ』のなかで、作者がもっとも忌むべき罪として攻撃しているものである。しかし、フィールドングは必要に迫られることがあまりにも多かつたため、金銭的援助にたいして律義に恩を感じていられなかったとも考えられる。また、政治家にたいする義理は彼にとってそれほど重要なものではなかったのだろう。この時期にはウォルポールもまだ、フィールドングのちょっとした風刺をあまり気にしていなかったとみえ、1730年の4月24日に初演された笑劇『親指トムの悲劇』(*Tom Thumb, A Tragedy*、のちに*Tragedy of Tragedies, or, The Life and Death of Tom Thumb the Great*と改題)を3度も観に行っている。この作品はお伽話に出てくる親指トムを偉大な英雄として描くことで、政界の「大物(Great Man)」ウォルポールをからかっているとも解釈されるが、当時は必ずしもそのような政治的風刺とは受け取られなかったようである。さらに1732年に出版された『当世風の夫』(*The Modern Husband*)がウォルポールに捧げられているところを見ると、まだこの時点ではフィールドングがウォルポールの庇護を期待していたことがわかる。

しかし、1734年に出版された『イギリスに來たドンキ・ホーテ』(*Don Quixote in England*)の戯辞は彼の政敵チェスターフィールドに捧げられている。また、1736年にはイートン時代の友人リッテルトン(George Lyttelton, first Baron Lyttelton, 1709-73)がチェスターフィールドとともに反内閣の新聞『コモンセンス』(*Common Sense*)を創刊したため、これ以後フィールドングは、これともう一つの反対派の新聞『クラフツマン』の紙上および舞台の上からウォルポールの攻撃し続けた。その結果ついに1737年の5月、演劇検閲令が公布されて、彼の劇作家としてのキャリアに終止符が打たれる。この法案が上院に提出されたとき、反対演説で熱弁を揮ったのはチェスターフィールドである。

演劇検閲令の公布によって劇作家としての道が閉ざされてしまったフィールドングは、1737年にミドルテンブル法学院の学生となって法律の勉強を始める。劇作家から法律家への転身というのは唐突な感もあるが、フィールドングの場合、祖父を始めとする母方の親戚たちが法律家なので、これは自然な選択とも言える。彼は精神的に法律の勉強に取り組み、ミドル

テンブル法学院の裁判所主事だった叔父ダヴィッド・グールド (Davidge Gould, c.1684-1765) の影響力もあって、普通は7年かかるところを2年半余りという異例の短期間で、法廷弁護士 の資格を得ることができた。

法律の勉強の傍ら、ウォルポールの反対派をパトロンとして、7年間『コモンセンス』に寄稿しただけでなく、自ら創刊した『チャンピオン』(*The Champion*, 1739-41)においても、この一派のために論陣を張り続けたフィールディングだが、1741年の12月には一転して、『反対派—夢』(*The Opposition: A Vision*)と題するパンフレットで、反対派を痛烈に風刺し、ウォルポールを好意的に描いている。このパンフレットのなかには、当時、数少なくなっていた文学者のパトロンの一で、フィールディングが書簡詩「真の偉大さ」(“True Greatness”)を献じて褒め称えたドディントン (George Bubb Dodington, Baron Melcombe, 1691-1762) も登場し、チェスターフィールドとリッテルトンが後援する『コモンセンス』も『ノンセンス』という名に変えて風刺されている。この態度の豹変には、ウォルポールによる買収、反対派のパトロンたちにたいするフィールディングの不满、その他の要因が考えられるが、チェスターフィールドもリッテルトンもこれに腹を立てたようすもなく、彼らのフィールディングとの関係はその後も続いている。さらに1743年にフィールディングが出版した『雑文集』の予約リストには、ここで風刺された反対派の主だった面々が名を連ねている。ウォルポールが3部予約しているのは上記の風刺パンフレットと関係があるかもしれないと、バテスティンは指摘している。盗品売買の元締で、処刑されたジョナサン・ワイルドを犯罪界の大物として、政界の大物ウォルポールに重ねた痛烈な風刺作品『ジョナサン・ワイルド』(*The Jonathan Wild the Great*)もこの『雑文集』に含まれているが、ウォルポールがすでに退陣して風刺の効果が薄れたこの時期になるまでこの作品が出版されなかったことについても、フィールディングとウォルポールの取引が推測されている。

ウォルポールが退陣したあと、ホイッグ党内のウォルポール反対派とトーリー党の連立内閣が発足し、フィールディングのパトロン、友人たちがこれに加わった。そしてフィールディングは、リッテルトンとベッドフォード公爵 (John Russell, 4th Duke of Bedford, 1710-71) の援助を得て、ウェストミンスター地区、さらにミドルセックス州の治安判事になることができた。と言っても実質的にフィールディングの力になったのは、裕福で力もあつたベッドフォード公爵である。ミドルセックスの治安判事になるためには年に100ポンドの収益をあげる地所を持っていることが必要で、フィールディングは年30ポンドの地代でベッドフォード公爵から土地を借りて、この条件を充たすことができた。しかし彼の死後、母親違いの弟でヘンリーの仕事を引き継ぎ、彼の遺産管理人になったジョン・フィールディング (Sir John Fielding, 1721-1780) は、ベッドフォード公爵にたいする地代がずっと払われていなかったことを知って愕然とする。ベッドフォード公爵はこの支払いを免除しただけでなく、ジョンにたいしても、兄と同じ条件でこの地所を貸すことを申し出さえた。ジョンはさすがにこの好意を辞退したが、ベッドフ

オード公爵のパトロンとしての気前のよさが、これによってはっきりと証明されている。フィールディングはミドルセックスの治安判事として働き始めてすぐ、間接税務局の法務官の地位を求める手紙を公爵に送っている。もしこの地位を得ることができれば、治安判事として窃盗や殺人、暴動を扱うよりは、楽な暮らしができたかもしれない。公爵はこの求めには応じなかったが、1750年の5月にフィールディングが王室裁判所 (the Marshalsea) 判事の地位を求めたときには、その任命権者であるマールバラ公爵に推薦の手紙を書いている。残念ながらこの地位はすでに他の者に約束されてしまっていたが、ベッドフォード公爵がなかなかよいパトロンだったことがわかる。このような恩恵にたいしフィールディングは、『ジャコバイツ・ジャーナル』(The Jacobite's Journal, 1747-48)で「公私ともに最も高貴な美德によって知られる」(“eminent for the most exalted public as well as private Virtues”)と褒め称えているし(307)、彼の義弟の選挙にさいしては全面的に協力している。

しかし、ベッドフォード公爵はその富を背景にして政界に影響力を持ち、クリケットを愛好したことによっても知られているが、文学の方にはそれほど関心がなかったようである。そのため、過度なほどの言葉でその恩義に感謝を表明しながらも、フィールディングはこの政治的パトロンにたいし、かなり割り切った気持ちを抱いていたのではないだろうか。彼はリッセルトンに宛てた『トム・ジョーンズ』の献辞のなかでもベッドフォード公爵に言及して、その「たっぷりした援助」(“the princely Benefactions”)に謝意を表明している(*Tom Jones*, 5)。しかしこれも、彼が書簡詩「真の偉大さ」の名宛人とし、また、最後の小説『アミーリア』(*Amelia*, 1751)のなかでも「この国が生み出した最も偉大な人物の一人」(“one of the greatest Men this Country ever produced”) (462)と最大級の賛辞を呈した、ドディントンにたいする扱いと比べると、かなり見劣りがする。バテスティンはフィールディングがドディントンのなかでどんな「偉大さ」を見出したのかと首をひねっているし、上記『アミーリア』中の賛辞は誰が見ても大袈裟すぎる。この過剰な賛辞は、フィールディングが文学のパトロンとしてのドディントンを評価した結果であろうか。

政治家以外のパトロンとしてはバースの資産家ラルフ・アレン (Ralph Allen, 1694-1764) がいる。彼は郵便事業で財をなし、さらにバース近郊の採石事業でその富を増大させた。彼はアレグザンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) その他の文人たちを援助し、フィールディングのライバルであるリチャードソンも、斜面をなす大きな風景庭園が眼下に広がるアレンの屋敷ブライアーパークに招かれたことがある。妻シャーロット (Charlotte Cradock Fielding, ?-1744) の病氣療養のためバースを訪れたフィールディングは、郊外のトワートン村にあるアレンの持ち家を提供されている。彼はここに滞在しているとき、毎日のようにアレンの屋敷で食事をしたと言い伝えられ、傑作『トム・ジョーンズ』のかなりの部分がここで書かれたと言われる。アレンはしばしば、フィールディングに経済的な援助をしている。これらの恩義にたいし、フィールディングは著述中でたびたび彼の徳に言及し、『アミーリア』はアレン

に捧げられている。そして、終焉の地となったリスボンへ出発する前に生まれた末の息子は、恩人の名を取ってアレンと名づけられた (Allen Fielding, 1754-1823)。ラルフ・アレンはフィールディング本人の在世中だけでなく、彼の死後、残された家族や妹で作家のセアラ・フィールディング (Sarah Fielding, 1710-68) を援助し、また遺言でもフィールディングの妻と3人の子供たちに100ポンドずつ遺贈している。セアラもアレンの遺贈を受けたうえ、彼に提供されたバースの家で生涯を終えている。

フィールディングにとってもっとも重要なパトロンはこのアレンと、イートン・カレッジ以来の友人リッテルトンであったと思われる。フィールディングは上記『トム・ジョーンズ』の献辞のほか、1735年に詩「自由」(“The Liberty”)をリッテルトンに捧げている。リッテルトンは自らも『死者の対話』(Dialogues of the Dead, 1760) その他の著述で知られているほか、チェスターフィールドとともに、『四季』(The Seasons, 1726-30)の詩人ジェームズ・トムソン (James Thomson, 1700-48) のパトロンでもあった。フィールディングと彼の関係は生涯を通じて親密で、様々な機会にフィールディングはリッテルトンに賛辞を呈している。彼が1747年に亡妻シャーロットの召使で妊娠6ヶ月のメアリー・ダニエル (Mary Daniel, 1721-1802) と再婚したとき、花嫁の介添えを務めたのもリッテルトンだった。サー・ロバート・ウォルポールの息子、ホレス・ウォルポール (Horace Walpole, 1717-97) が書き留めた逸話によれば、リッテルトンが彼にこの結婚をさせたのだという。『トム・ジョーンズ』では、フィールディング自身と性格的に重なることの多い主人公トムが、宿の娘ナンシーを妊娠させて捨てようとするナイチンゲールを説得し、ナンシーと結婚させている。リッテルトンがフィールディングを説得してメアリーと結婚させたとすれば、非常に興味深いところである。

フィールディングにとって、リッテルトンやアレンはパトロンであると同時に友人であった。良い家柄に生まれついたフィールディングは、紳士としての誇りをつねに意識していた。劇作家になるにあたって、雇われ仕事の作家 (hackney writer) になるか貸し馬車の御者 (hackney coachman) になるしかないと言ったというのは語呂合わせの洒落でもあろうが、彼の置かれた経済的な状況を表わしている。イートン時代の友人たちの多くが貴族の家柄で、国会議員となったのになら、彼はその文才によって身を立ててはならなかった。フィールディングが友人たちとその仲間をパトロンとして、舞台と政治的な定期刊行物への執筆を通じて彼らの政敵を攻撃したのは、経済的な援助のためだけではなく、自らの能力によって彼らと肩を並べたいという気持ちが強かったのではないだろうか。自分の機知と文才を縦横に発揮したかったということももちろんあっただろう。しかし、このような活動の多くは雇われ仕事で、フィールディングを満足させるようなものではなかったはずである。そのため、一転して反対派を笑いものにし、ウォルポールを好意的に描いた『反対派—夢』を書くことにもなったのだろう。フィールディングは政治家に多くのパトロンを持っていたが、彼が本当に必要としていたのは、援助してくれるだけでなく、友人として遇してくれる人たちだったのである。彼が過剰なほど



の賛辞を呈したドディントンも、パトロンであると同時に友人だった。彼よりはるかに有力な後援者であるベッドフォード公爵にも勝る、格段の賛辞がドディントンに捧げられた理由もそこにあると考えられる。

#### 参考文献

- Battestin, Martin C., with Ruthe R. Battestin. *Henry Fielding: A Life*. London and New York: Routledge, 1989.
- A. S. コリンズ (著)、青木健・榎本洋 (訳) 『十八世紀イギリス出版文化史—作家・パトロン・書籍商・読者』(彩流社、1994) (*Authorship in the Days of Johnson: Being a Study of the Relation between Author, Patron, Publisher and Public, 1726-1780* by A. S. Collins, 1927)
- The Dictionary of National Biography*. London: Oxford UP, 1917—.
- Fielding, Henry. *Amelia*. Ed. Martin C. Battestin. Wesleyan Edn. Oxford: Clarendon Press, 1983.
- . *The Jacobite's Journal and Related Writings*. Ed. W. B. Coley. Wesleyan Edn. Oxford: Clarendon Press, 1974.
- . *Joseph Andrews*. Ed. Martin C. Battestin. Wesleyan Edn. Oxford: Clarendon Press, 1967.
- . *Miscellanies*, Vol. I. Ed. Henry Knight Miller. Wesleyan Edn. Oxford: Clarendon Press, 1972.
- . *New Essays by Henry Fielding: His Contributions to the Craftsman (1734-1739) and Other Early Journalism*. Ed. Martin C. Battestin. Charlottesville: UP of Virginia, 1989.
- . *The History of Tom Jones, a Foundling*. Ed. Martin C. Battestin. Wesleyan Edn. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1974.
- Miller, Henry Knight. *Essays on Fielding's Miscellanies: A Commentary on Volume One*. Princeton: Princeton UP, 1961.
- Montague, Mary Wortley. *The Complete Letters of Lady Mary Wortley Montagu*, Vol. III (1752-1762). Ed. Robert Halsband. Oxford: Clarendon Press, 1967.
- Pagliari, Harold. *Henry Fielding: A Literary Life*. Basingstoke and London: Macmillan, 1998.
- Paulson, Ronald. *The Life of Fielding*. Oxford: Blackwell, 2000.
- Rogers, Pat. *Henry Fielding: A Biography*. London: Paul Elek, 1979.
- Thomas, Donald. *Henry Fielding*. 1990. New York: St. Martin's Press, 1991.